

地域研究の目指す地平

米田 巖

夢があるから、夢があるから生きていられる。西行は出家した。坊主になるためだけではない。漱石の故のみでもない。修行し、根本をおさめるためだ。体力がいる。気力がある。文弱な世捨て人ではない。己に打ち勝ち、本当の己が見えて得くるまで、ひたすら根本を目指して邁進するのだ。

空海がきわめようとした真言密教の聖地吉野の山水神社（みくまり）に西行座像がある。ここは秀吉がわが継嗣欲しくて願を懸けついに霊験あらたかな神の思し召しにより、秀頼を授かったという由緒ある神社である。たれしも、見果てぬ夢があるから祈り続けるのであろう。天下人、秀吉の一粒種、その秀頼も舅に最後の息の根を止められてしまう。子も、天下もすべて空しくなった。

日も暮れぬ。人も去る。形あるものは壊れその陰も形に添い、消えてゆく。平家、鎌倉幕閣を率いた源氏、織田、今川、武田そして豊臣、徳川も栄華を極め、そして歴史の舞台からことごとく消え失せた。統治機構は、その組織形態がどのようなものであれ、権力を基盤にする故、いずれ衰弱・壊死する。それが権力にまつわる栄達名誉・位階勲等の配分に深くに係わっているだけに、有為転変、ことごと始末ににおえぬ結果をもたらすことになる。その余勢でたまさか埒外のみびとをも一気に巻き込み、取り返しのつかぬ窮地へ追い込まれ、予想だにできなかった結末を引き起こすことも少なくない、それが近因・遠因となって阿鼻叫喚の生き地獄を見た事例も枚挙にいとまのないほどである。枯れ野のなか、化野（あだしの）に、ただうつつみの夢のみが揺らめき、漂いながら、見果てぬ彼方まで続いている。

博多の石屋のせがれとして生まれた広田弘毅は、修猷館から一高、東大と進む。一年浪人したが、念願の外交官試験に合格し1933年には順当に累進を重ね、ついに外務大臣となった。1936年2月26日、2・26事件が勃発した。満州事変は中国侵略戦争であるとして中国が国際連盟に提訴したため、リットン調査団が組織され事実関係を精査した結果、中国の提訴が認められ、日本は国際連盟を脱退することとなった。

1936年には、広田内閣が発足した。日独防共協定が批准された。日本は爾来軍部の独走を防ぎきれず破滅の道を突き進んでいくことになる。1937年近衛内閣が組閣され、日中戦争はいよいよ泥沼の様相を呈するようになった。南京事件、廬溝橋事件はその事を象徴的に指し示す日中関係史の分水嶺として記憶されることになった。これが尾を引いて結局のところ極東軍事裁判における戦争責任の量刑を決める最大の論拠とされた。妻の静子は有罪判決の日から7日目

に自決、広田は巢鴨プリズンでその事を、慰問にきた息子から聞いた。処刑の日、妻宛の手紙をしたためている。時局の大きな渦にわが身を委ねざるを得なかった広田は何を思っているのか。その胸中、忖度して余りあるものがある。

史実としては、東条英機らの武官に混じって、文官ではただひとり戦犯として処刑されたということにすぎない。翌日、あろう事か、幽冥界を異にして、岸信介、児玉誉志夫らが釈放になった。

大戦間の日本の近代史をつぶさに繙けば、自由民主党を基軸とする議院内閣制度の根幹を支え、国政を操ってきた指導者層が、国策を誤り、多くの国民と近隣諸国の人々に塗炭の苦しみを与え、絶望と惨禍の渦中へ追い込んだということを、明白な歴史的事実として認めないわけにはいかない。老獪な手綱さばきで汚辱の暗闇を生き抜き、汚名を注ぐどころか、戦争犯罪人の系譜にすらその名を連ねることなく、少なからぬ疑獄事件に連座しながらも、法網を巧みにすり抜け、かいくぐってきた人々はいますでない。しかしその所業だけは国民の心底に深く刻まれている。

これらの人々の所業は基本的なところで共通性があり、次の点で酷似している。すなわち、①誤った選良意識－エリートイズム、②国家権力は国民に由来するものであり、従って国民の負託による、という民主主義の原理を換骨奪胎して、濫用・誤用しているという点、③国益と私益の混同及び国益の拡大解釈 ④独りよがりと自我の肥大、⑤視野狭窄症 ⑥官・軍／軍／産複合体制を官僚制と天皇制によって再編し、国家の近代化を図ろうとしたこと、そしてそのようなレジームがマスをつつと統制するために最も効率的と思いついておられる点、それらの陥弄に全く、あるいはほとんど気付いていないこと、等である。

いずれにせよ、国民による国家、国民のための国政、立憲君主制／在権民主的思想は形式上担保されても、名目的なものにすぎない。エリート層は誰も、どこでも、いつでも国民を見ていない。国民が社会の主人公でないのである。近代日本の蹉跎は真の原因はここに存在する。

一部の選良のエリートイズムがいびつな形で権力／統治機構と結びつき、権力の集中に着手しはじめた、その瞬間から、国策を誤り、国運の衰退がはじまる。形態的には行政部門の立法・司法への絶対的優位、あるいは肥大化という形をとる

時勢一時の勢いというものにはあらがいがたい。官僚制、天皇制、軍事ファッショ、産業民主主義、労働組合主義、などありとあらゆるシステムのモーメントは、権力と名誉・栄達、資本利潤と結びついているだけに一方向に走り出したら、余勢をも駆って奔流となり一気に加速していく。怒涛の如く迫りくる巨大な渦の埒外にあつて、その方向をねじ伏せたり、そらす、などという如きは絵空事、ほとんど不可能に近い。何としてもベクトルの方向を国民の側に向けなおさなくてはならない。

民のありよう、民の心をどう理解し、どうとらえるのか、当面の課題として掲げ、ここから社会の形や仕組みを考えていくことから再出発する必要があるように思われる。

近時社会科学の領域でも地域、空間、環境など本来地理学固有の概念が人口に膾炙し、研究者の間でも多用されていることは大いに慶賀すべき現象であるが、概念を正確に理解し、操作概念として用いている例は極めて少ない。

内外の地域環境を研究対象として比較動態地域学的考察を試みてきた筆者から見れば、地域を離れて民はあり得ないし、環境を離れて民はあり得ない。また空間を離れて、ひとり民があるなどというごときにいたっては夢想だにできない。経済現象、社会現象をこれらの概念から遊離・切断してそれ自体を対象化する、という方法そのものが問われなければならない。

先回の雲南大學、そして今回の北京大學とのコラボレーションも国際基準からすれば改善すべき余地は相当残っている。直接コミットしていないので詳細は避けることにするが、①素材（食材）の善し悪し／吟味 ②調理の仕方 ③サービングの仕方とタイミング ④長期的視点に立った研究交流とコラボレーションのあり方 ⑤プレゼンテーションの方法／通訳・ディスカッション／チェアマンの配置・パネルディスカッションのあり方等に加えて、予算執行の面でも少なからぬ問題が解決すべき課題として残った。

ここで、隣接諸科学諸賢に対してプロテスタントとしての測鉛線を陽表的に明示し、研究方法、およびそれに基づいた研究成果の発表・研究交流のあり方へ異議申し立てをしなければならない時期にきているように思われる。またその意義も、社会科学が研究対象、研究方法等において四分五裂の状態を見るにつけ、決して少なくないと考えられる。

愚者、愚考の一徹と失笑を買うことを恐れては何事も始まらない。市民、民の心、そして地域の環境は、立てて、立てられぬ不立文字、文字にて立てる以前の実体を地域環境に即して見ずして、どこに、どのように、どのような根拠をもって社会科学研究を打ち立てようとしているのであろうか。近代日本の蹉跌が何によって惹起されたのかを省みるとき、輸入学問として跛行的発展を遂げた日本の社会科学の脆弱性を痛感せざるを得ない。科学的市民社会論の定立を切に願う所以である

TOKYO INTERNATIONAL WAR CRIMANAL TRIBUNE

PRIME MINISTER KOUKI HIROTA

DEATH BY HANG

(1878～1948)

どうしてか、どのようにしてか手元到大町桂月と西郷南州（隆盛）、そして広田弘毅の手になる真筆が掛軸として残された。父の遺留の品である。風流人大町は旅の空にあそぶ風趣をうたい、西郷の雄渾な筆遣いから人事を尽くして天命を俟つ、という言葉が胸をうつ。広田のそれは安袍にやすんずるなかれ、と読める。筆者は、文字になる前のそれぞれの思いを凝視しようとした。それぞれの思いをもって近代日本を形づくろうと渾身の努力を傾けたからである。